

キャリア教育における授業効果の検討 —資質・能力と自己効力感に着目して—

原 瑞穂 (山梨大学)

キーワード: キャリア教育, 授業効果, 資質・能力

はじめに

本研究では、本学の「キャリア形成論」の受講者を対象としてキャリア教育の授業効果を調査した。

目 的

授業の前後で学生の資質・能力 (基礎力: 大久保, 2006) に変化が現れるのか、また、本講義の目的である自己効力感と進路選択に対する自己効力を向上させるのか、授業効果を検証する。仮設モデルを Figure 1 に示す。



Figure 1 本研究の仮設モデル図
方 法

時期 平成 28 年 (2016) 4 月と 8 月の 2 回。
対象者 平成 28 年前期に本学の全学共通教養科目の「キャリア形成論」の受講学生 197 名の内、未提出者と内容の不備な者を除いた 185 名を調査対象とした。
手続 調査は授業中に実施し、調査前に調査対象者に調査の趣旨と個人情報及び結果の取り扱いに関する説明を行った。回答をもって同意が得られたと判断した。所要時間は 10 分～15 分程度であった。回答後、回収した。
調査内容 使用した基礎力は 大久保 (2006) の 9 項目 (親和力、協働力、統率力、課題発見力、計画立案力、実践力、感情抑制力、自信創出力、行動持続力)、心理尺度は、一般性セルフ・エフィカシー尺度 16 項目 (2 件法)、進路選択に対する自己効力尺度 30 項目 (4 件法) であった。
分析 SPSS.Vir21 を使用した。

結 果

まず、各基礎力と心理尺度の授業前後の平均値の差を調べた。授業前後の各基礎力の平均値の相関係数は、.63 ～ .79 であり、0.1% 有意の高い値が得られた。効果量は $r = .42 - .62$ で全項目中～大程度の効果であった。自己効力感と進路選択に対する自己効力の授業前後の相関係数は、.76 と .70 であり、0.1% 有意の高い値が得られた。効果量は $r = .06 - .16$ であり、自己効力感とはほとんど効果が得られず、進路選択に対する自己効力では小さな効果が得られた (Table 1)。次に、本研究のモデル図を確認するために、各項目の影響関係を重回帰分析にて調べ

たところ、仮設モデルで予想したパスが全て確認された。結果を表 Table 2, Figure 2 に示す。

Table 1 各項目の授業前後の平均値の比較と効果量

対応サンプルの差		結果	効果量
平均値	SD		
親和力 - R 親和力	-.51	$t(182) = -10.77, p < .001$	.62 大
協働力 - R 協働力	-.51	$t(183) = -9.01, p < .001$	.55 大
統率力 - R 統率力	-.53	$t(183) = -9.41, p < .001$	.57 大
課題発見力 - R 課題発見力	-.48	$t(183) = -9.06, p < .001$	.56 大
計画立案力 - R 計画立案力	-.54	$t(183) = -9.19, p < .001$	.56 大
実践力 - R 実践力	-.47	$t(183) = -7.02, p < .001$	.46 中一大
感情抑制力 - R 感情抑制力	-.34	$t(183) = -6.28, p < .001$	.42 中一大
自信創出力 - R 自信創出力	-.43	$t(183) = -7.34, p < .001$	.48 中一大
行動持続力 - R 行動持続力	-.43	$t(183) = -6.45, p < .001$	.43 中一大
自己効力感 - R 自己効力感	-.45	$t(183) = -.85, p = n.s.$	.06 ほとんどなし
進路選択に対する自己効力	-1.69	$t(180) = -2.11, p < .05$	.16 小

注1) 自己効力感とは換算後の値を用いた。
注2) R=2 回目の結果
注3) $r = .10$ (効果量小)、 $r = .30$ (効果量中)、 $r = .50$ (効果量大)

Table 2 重回帰分析の結果

I→II		II→III		I→III	
説明変数	標準偏回帰係数 (β)	説明変数	標準偏回帰係数 (β)	説明変数	標準偏回帰係数 (β)
既存の資質・能力 (基礎力)	.47***	r 自己効力感	.62***	既存の資質・能力 (基礎力)	.49***
決定係数 (R^2) = .22***		決定係数 (R^2) = .38***		決定係数 (R^2) = .24***	
*** $p < .001$		r 自己効力感	.55***	r 学修後の資質・能力 (基礎力)	.76***
		決定係数 (R^2) = .18***		決定係数 (R^2) = .57***	

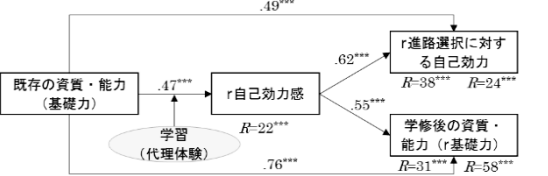


Figure 1 重回帰分析の結果
考 察

キャリア形成論の授業は、経験によって自己効力感を向上させ、自らの発達を管理できることを目的としている。受講した学生は自身の既存の資質・能力が向上したと感じ、自己効力感の向上を通して学修後の資質・能力を高め、さらに進路選択に対する自己効力を向上させることが示唆された。この結果から、授業効果は得られたと言えよう。しかし、自己効力感の効果量はほとんどなしであった。4 ケ月の体験型授業の効果は、自己理解の深まりとメタ認知育成により一時的に下がると考えられ、継続的に効果を上げるために、後期の授業やその後の活動での実践が重要な課題になることが示唆された。